

龜さん

林芙美子

青空文庫

むっくり、むっくり、誰もとおらない田舎みちを、龜さんが荷物を首にくくりつけて旅をしていました。みちの兩側は廣い麥畑です。

麥畑の上をすずしい風がそよそよと吹いています。「ああ、くたびれた。どこへ行ったら水があるのかな。」龜さんは首を持ちあげて、じつとあたりをみました。

どこかで蛙の合唱がきこえます。何でも、このへんには蛙の小學校があるのでしょうか。聲をはりあげて蛙がうたっています。龜さんは荷物をおろして、どっこいしよと石ころの上にはい上がってやすみました。

「おいおい、誰だ、重くてつぶれそうだよ。」

小さい聲がきこえます。龜さんはびっくりして石から降りました。

「誰だね……。」

龜さんがきよとんとしている眼の前に、によろによろと小さいみみずが出てきました。龜さんはびっくりして

「ああおどろいた。」

といました。みみずはまだ子供です。

「おいおいみみずさん、このへんに水をのむところはないかね。」

龜さんがききました。みみずは赤いからだをくねくねうごかして、「もう、すぐそこにあるよ。」と教えてくれました。みみずは大きい龜さんを見て、どうもこのへんにはみかけない龜だとおもって、

「おじさんはどっから來たの。」

とたずねました。龜さんは腰からタバコ入れを出してタバコを一ぶくつけて吸いました。「わたしは遠いところから來たのだよ。汽車に乗ってね、二日もかかってここへ來たのさ。どこか働くところはないかと思つてね。」

「ふうん、おじさんは貧乏なんだね。」

「うん、貧乏なのさ、だから、うんと働いてお金をためてかえろうと思ふのさ……。」

「何をして働くの。」

「そうだね、おひっこしの手傳い人夫でもしようかと思つてるんだけどね。」

みみずはおかしくなつて笑いました。だつて、のろのろしている龜のおじさんに、お引越しをたのむものはないだろうと思つたからです。

「わたしは朝から何もたべないのだよ。おなかがぺこぺこだけど、このへんに飯屋はない

かね。」

「こんな田舎に飯屋なんてありやアしないよ。ここは蛙縣の蛙村といって、この村へ來たからには、蛙の村役場に行つて、とどけをするんだよ。」

「ほう、蛙村というところかね。——どんなとどけをするのかね。」

「村役場へ行つて、村長にちよつと顔を見せればいいのさ。おじさんの話次第では、宿屋もみつけてくれるかもしれないよ。」

「ほう、村長はやさしいのかね。」

「やさしい時なつてめつたにないけれど、おだてのきく蛙村長だから、そのつもりで行けば何でもないよ。」

「いい景色の村だね。金持ぞろいが住んでいるみたいだね。」

「なアに、金なんてありやアしないよ。みんな貧乏なのさ。おしゃべりが好きだから、仕事なんかしないで會議ばかりしているので、金なんかすこしもありやアしないよ。」

みみずはまぶしそうにお陽さまをみています。糸のような赤いみみずは、龜さんのおじさんにちよつとうまそうにみえました。みみずは龜さんがこわい眼をしたので、こいつはおつかないぞと、すぐまた石の下へもぐりこみました。

「何もしやしないよ。わたしは旅のものだから悪いことはしない。安心して出ておいでよ。」

「いやアだよ。うまいことをいって、ぱくりと僕を食うつもりだろう。僕はねむいから失禮するよ。」

「まアまア、そんなことをいわないで出ておいでよ。」

みみずはどうしても出て來ません。龜さんはタバコ入れをしまつて、また荷物を首にくくりつけて、むつくり、むつくり、歩きはじめました。

むつくり、むつくり、むつくり、いくら歩いても同じ道で、じりじりとお陽さまがてりつけるので龜さんはあつくてたまりません。早く水がのみたいと思いました。村の入口へさしかかると、蛙の市がたつていました。いろんな店が出ていました。ほしいものは一つもありません。むつくり、むつくり、市のなかを通りすぎてゆく龜さんを見て、蛙の子供や、蛙の男や女がびつくりしてみちへあつまつて來ました。

「役場へ行きたいのだが、どっちへ行つたらいいのかね。」

龜さんが、きよろきよろしてたずねました。蛙たちは、みすぼらしい龜さんが、荷物を首にくくりつけて歩いてゆくのをみて笑い出しました。

「たいへんなものが来たよ。どっちから来たのかね。——おいおい、早く村じゆうへ戸じまりをよくして、一つでも、ものを盗まれないように用心するようふれてまわんなさい。」

意地の悪るそうな蛙が大きい聲でいました。子供たちは走っておうちへかえりました。誰も役場を教えてくれないので、龜さんは途方にくれてそこへつつ立っていました。そこへ子供のしらせで蛙の巡査が来ました。

「おいおい、お前はどこから来たのだ。」

「わたしは汽車に乗って二日ばかりでここへ来たのですよ。どこか働くところはありますかと思ひましてね。」

巡査は帳面を出してかきつけました。

龜さんは汗をふきながら答えました。

そこへ蛙の先生がとほりかかつて、龜さんを役場まで連れていってくれました。先生は龜さんに同情している様子です。

「この村のものは、世間のことは何も知らないのですよ。自分たちぐらいえらいものはないとみんな思っているでしょう。田圃に水がはいるころになると、いまに蛙合戦がはじまって、それは大變なことになるんで、わたしはいつもそれがいやで山の奥へ家内と子供を

連れて逃げてゆくのです……。」

「ほう、面白いところですね。」

やっと役場の前へ來ると、蛙の先生はまたおめにかかりましようとかえってゆきました。むつくり、むつくり、龜さんは蛙の役場へはいつてゆきました。村長の部屋の前には龜さんのような旅のものが列をして待っていました。日傘を持った尺取り蟲だの、迷子になった小さい子供蛇だの、籠を背負ったもぐらのお婆さん、帽子をかぶった雀の親子もいました。

龜さんがはいつてゆくと、尺取蟲が村長によばれて行きました。

しばらくして尺取蟲の娘さんは眼を泣きはらして出て來ました。それから迷い子の蛇が呼ばれましたが、これもすぐ、二人の番人がおそろおそろついて出て來ましたが、小蛇はみんなの前で金網の中へいれられました。もぐらもちのお婆さんは、みじんこのつくだ煮を村長さんへ贈りものにしたとかで、笑いながら出て來ました。雀の親子は長いあいだびいちくびいちく村長さんと話していましたが、これも元氣で出て來ました。

さて龜さんの番です。

龜さんは胸がどきどきしました。どんなことをいつて蛙の村長さんに好かれたらよいの

かわかりません。

おずおずと村長さんの部屋へはいつていくと、村長さんはメガネをかけて椅子に腰をかけていました。

「へい、わたしは龜池村の龜十と申しますもので、はるばる蛙村へ出掛けてまいったものでございます。」

「ふうん、龜池村というのはどんなところだ。」

「はい、大きい池がございまして、魚がたくさんおりまして、わたしたちは住むところがないもので、こちらに働き口はないかと思つてまいりました。」

「お前さんはどんな演説が出来るかね。」

「演説……。」

「そうだよ。」

「わたしは演説なんか生れて一度もしたことはございません。わたしは、生れるとから黙つて働いてきたもので、おしゃべりなぞとても出来ません。」

「この村に來たからには、演説が出来なければ駄目だよ。自分の意見をもたないものは住むことはおことわりだ。」

「それは困りましたね、わたしは只、働く一方で、どうしてもしゃべる事は出来ないのです（ございませが……。」

龜はお金を持たないので、そのままずっと蛙村をたちさらなければなりませんでした。

夜になって、麥畑の上を美しいまんまるのお月さまが光っていました。おなかのすいた龜さんは、むつくり、むつくり、みみずのいたところまでもどって來ました。

「みみずさん、今晚は……。」

「おやおや、どうしたの龜のおじさん。」

「蛙村から追い出されて戻るところだよ。」

「それは氣の毒だなア……。」

「わたしはもう眼がまいそうだ。」

龜のおじさんは荷物をおろして、首も手足もちぢめて石ころの上へしゃがみました。近くでがやがやと蛙の演説がきこえています。

龜さんはかわいた固いこうらをほこりまぶれにして、ぼんやり夢の世界へはいつてゆきました。

青空文庫情報

底本：「童話集 狐物語」 国立書院

1947（昭和22）年10月25日発行

入力：林 幸雄

校正：鈴木厚司

2005年5月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

龜さん

林芙美子

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>